

土岐の昔ばなし  
第七話

# おしのと火童子



TOKI-City  
tourism association  
土岐市観光協会



※元屋敷窯跡…約400年前の桃山時代に造られたこの窯は、全長24.7m 幅2.2m 14房の焼成室から成る大窯で、当時の技術を極めた連房式登窯です。

土岐の昔ばなし 第1話から第6話まで閲覧・印刷できます！

1. <http://www.tokicity.jp/> (土岐コミュニケーションセンターHP) にアクセス
2. 「土岐市観光協会ホームページ」のバナーをクリック
3. HP 右側にある「良く分かる！土岐の昔話」のバナーをクリックするとお話の一覧が表示され、閲覧・印刷することができます。



## 予告

次回の昔ばなしは、鶴里町の「椀貸池」です。2012年7月頃発行予定 乞うご期待

# おしひのわと火童子らし

もう、とつくに真夜中を過ぎていたのに、おしのはさつきから、一生けんめいに起きていました。パチパチといきおいよく燃える火の音を窯のそばで聞いていると、さつきまでの忙しい割木運びの疲れが出て、ぐったりとして眠くなります。

あたりは真暗ですが、窯からまるで龍の赤い舌のように吹き出している炎が、あたりをぼんやりと明るくさせていました。

ときどき、おかあが割木をくべるとき窯の焚口のまわりが思い出したように明るくなるのを、まるで夢を見ているような気分で、ぼんやり眺めていました。

今朝おしのは、まだ赤ん坊の弟が泣く声で目がさめました。

おかあとおとうの騒々しい足音とともに、きのうまで元気がよかったおとうが、這うようにして時だのに、こうえらでは立つとられせん。もし、やり損ったら、おんし達も覚悟せな、あかんかも知れんな」といいました。



おしのはそばの寢床にもぐり込むと、ううん、ううん、ううんとうなりはじめました。

おかあは、おとうの頭を冷したり、薬を煎じたり、それはもう、たいへんな騒ぎで、いつもの朝とは違っていました。

おとうは、今日で七日間、家の外にある大窯の火を燃しつづけていたのですが、今朝の早霜の降りる急な冷え込みのために、風邪をひいてしまったらしいのです。

おとうは苦しい息づかいで、

「こまった！こまった！もうちょっとなんだがなあ。今おれが寝込んだら窯がよっちゃまう。今度の窯のなかには、浅野館から頼まれていた、来年の春にお姫様が朝倉へおこし入れなさるとき、持って行きやあすもんが、仰山つまっとるで、どうしても焼き損いはできんどのう。今がいちばんだいじな

こういうわけで、幼いおしのは朝からずうっと、いつもは、おかあのおする窯の焚口までの割木運びを手伝い、おかあはおとうの代わりに絶えまなく窯へ割木をくべました。

朝からの目の回るような忙しさに汗を流したのも陽が落ちてからようやく終り、うまくいけば明日の朝には焼きあがりそうです。

暗い闇のなかに吹きだす赤い炎をじっと見つめているおしのは、窯のそばの暖かさが気持ちが悪く、さつきからいつかおとうから聞いた「火童子」のことを、ぼんやりと考えていました。

お不動様のお使いといわれている火童子は、神様を敬う正直者の窯へは必ずやって来て、焼き物がうまくできるよう助けてくれるといわれているのですから、今日一日中おとうのかわりに火を燃やしつづけているおかあのためにも、家族の命にかかわるこの窯がうまく焼きあがることを、火童子に祈らずにはいられませんでした。

火童子は、ふだんは透き通るような美しい緑色

をしていて、木の葉や草のなかに住み、夜露を食べ  
ていますので、めったに人の目につくことはありません。

でも、秋の満月の晩などは、虫の鳴き声にまじつ  
て、火童子の吹く笛の音が聞こえることがあると  
いわれていますので、おしのは火童子が近くまで  
来ているならば、優しい笛の音が聞こえるかも知  
れないと、耳を澄ませました。いままで気がつかず  
にいた虫の声が、回りの闇のなかに一段と高く聞  
こえました。

しばらくおしのが闇のなかを見つめていると、  
不思議なことに近くの木の葉の下で笛を吹いたり、  
枝にぶら下がったりしている緑色の火童子が、  
たくさんいるのを見えました。

火童子はふさふさとした長い髪を  
もった裸足の子供で、背はわずか七  
センチくらいの可愛さで、みんなむ  
じゃきに遊んでいます。

すると、なかでも腕白そうな火

ました。

火童子が真っ赤になってゆくに  
つれ、ふさふさとした長い髪がだん  
だん逆立ち、長い炎となって燃えあが  
りました。

あちらでも、こちらでも石を打つ音がし  
て、火童子の数が増え、やがてそれが力強いリ  
ズムになると、にぎやかな踊りが始まりました。

炎となった長い髪は、光を増して輝き始め、あた  
りが明るくなると、火童子達の楽しそうな顔がよ  
く見えます。

歌う者、踊る者、なかにはふざけ合ったり喧嘩し  
たりしている者もいます。みんな楽しそうです。  
すっかり見とれているうちに、おしのも火童子と  
同じように、とっても楽しくなっていました。

しばらくすると、突然踊りの調子が崩れだし、様  
子がおかしくなると、周りがだんだん暗くなり始  
めました。すると火童子達が口々に、

「たいへん、たいへん」

童子が飛び出して来て、色見穴から窯のなかへ入  
り、懐から火打ち石を取り出し、カチーンと一つ打  
ちますと、火童子の緑色の体は、ぼうつと赤くなり  
だしました。

すると別の火童子が出てきて、一緒になって石  
をカチーン、カチーンと打ちました。

火童子がみるみる赤くなりだすと、また別の火  
童子が石を取り出し、思い思  
いに打ち始め



「おとうが風  
邪ひいた」

などと騒ぎ出したのです。おしのは急に悲しくなり、  
「おとうを助けて！ お願い！ お願い！」

と、繰り返えし叫びました。火童子達は驚いて、  
シーンと静まり、みんないっせいにおしの方を  
見つめました。

おしのは火童子達のいっばいに見開いた目に向  
かって、一生けんめい

「お願い！ おとうを助けて！」  
と訴えました。

すると火童子の一つが、別の火童子の肩の上へ飛びあがり、火打ち石を合わせてカチーンと打ちますと、二つの髪は重なり合って逆立ち、長い炎となりました。

さらに別な火童子がその上に飛び乗り、三つに重なり合うと、前よりも激しく石を打ちました。見る見るうちにたくさんの火童子の肩車ができ、懸命に炎の髪を振り回すと、暗くなりかけた窯のなかが再びパアッと明るくなりました。

輝きを増した炎が渦を巻き、火童子の歌声がやがてゴウゴウと響き変わると、眩しい光のなかを火童子達は宙を舞い、急に輪になったりまた離れたりして踊り狂いました。

どれくらいだったでしょう。

「おしのをどかさなあかな」

「ううん、ええで寝かせとけ、風邪ひかすといかんぞ」と、おかあと咳をしながら話すおとうの声で、おし

天女の舞衣のようにはつきりと見えました。

おとうが長いトコボセ（火かき棒）で、光の塊になった色見を窯から引き出すと、三人は息を飲んで覗き込みました。

みんなの見守るなかで、色見は黄金色から赤に変わり、やがて、緑になってゆきました。

おしの中には、それがまるで火童子が元の緑色に戻っていくように見えました。緑釉が、しだいに透き通るような深い美しい緑色の光を放つように見えたととき、おとうは初めて嬉しそうに、

「きとる。きとる！もう大丈夫だ！」  
と大きな声をあげました。

おしのは、いつの間にか  
明るくなり始めた空へ窯  
から出る煙が静かに昇っ  
て行くのをながめながら、  
一夜に三百里を走るとい  
われる神様のお使いー火  
童子が、遠い秋葉のお山か

のは我に返りました。おしのは、気づかない間に掛けてあったおかあの着物をはねのけて、

「おとう！」と叫びました。

いつ起き出して来たのか、たくさん着物を着込んだおとうはまだ元気がなさそうですが、にっこり笑って近づき、大きな手でおしのの頭をなでると、「すまんかったな。ようやくた。さあ、色見を出すぞ」といって、えり巻きをはずし、おしのの首にふつくと巻いてくれました。

慣れた手つきで仕度をする時、おとうは窯の色見穴を開けました。パアッと強い光が真剣なおとうの顔に当たると、まるでおとうが、お不動様のように見えました。少し離れた所からおしのも色見穴から窯のなかを覗きましたが、眩しくてとても目が開けていられませんでした。しばらく目を細めてみると、ようやく何が見えるようになって来ました。

すると窯のなかではさつき見た大勢の火童子達の踊りがまだまだつづいていて、真赤な長い髪がらほんとうに来てくれたのだと思いました。  
虫の声にかわり、ツグミや、ヒヨドリのさえずりが元屋敷いっただいに広がると、東の山々に金色の光が真横に一筋走り、大きな朝日がゆつくりとのぼるのが見えました。

（文…安藤英夫）  
（絵…寺井銈明）

※このお話は、昭和五十二年に下石町の安藤英夫さんが創作し、土岐の昔ばなしに掲載されたものです。平成十八年に地元有志により下石公民館で演劇として催され、評判となりました。

現在でも、焼き物の町・土岐市の心温まる作品として多くの方から親しまれています。



このお話は、(社)土岐青年会議所発刊の「土岐の昔ばなし」から転載させていただきました。